
詩

Sorairo 光

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩

【Nコード】

N6892Z

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

時々、感情を音へ変換したもの。言葉の繋つなぎ。言葉はむずかしいので、読んでいただいた読者様にそれぞれの考えが持てるようなものを書けたらいいなーと思っております。それぞれに関連性はあまりありません。

底へ沈む。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、自分を苦しめていた。君は、ちよつとだけ笑った。

それは、待機中に散布して、やがて、淡く溶けて鈍色に輝いた。僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

鳥に惹かれていた。僕は、音にならない泡をはくだけだった。

僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

想いは、ぎゅうぎゅうに締め付けられて、一つばかり眺めてしまつて、僕は溺れていく。

いらない、だけど弱い僕は、欲しい願う。鳥も、あたたかな日差しも。

僕がぎゅうぎゅうになるのは仕方なくて、僕がどんどん沈んでいくのも仕方なくて、僕は僕を戒めるために冷たい刃を突きつけた。

僕は僕を知っていたのに、僕は僕を知らないふりをした。

泡を吐き続けて、柔らかな日差しと美しい翼に魅入りながら、僕は沈んでいく。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、僕は刃を僕に向ける。

弱くて、弱くて、矛盾を求めて、弱虫な僕は、どんどん沈んでいく。魚のように青い宙そらを泳げたならば、風のように碧い大地を駆け巡ることができたならば。

どれも叶わぬ夢を見て、眠るように、引き上げられる時を待っている。

永遠に目覚めぬかもしれない時をすごしながら、白んでいく視界を眺めていた。

こがれて

憧れていた。でもきつと君たちは知らないだろう。

僕は、通り過ぎて、消えるだけの存在だから。

僕は、青い青い光が羨ましかった。僕は、青い、青いキラキラが羨ましかった。

僕は、白いキラキラも、白いふわふわも、ひとつひとつの粒も羨ましかった。

駆け巡るたびに感じる緑のわさわさも、茶色のゴツゴツも、灰色の何かも、トゲトゲした銀色も、羨ましかった。

僕が向かう先は、誰も知らない。僕がどこで生まれて、どこから来て、どこで消えるのか、そんなもの、僕にもわからない。

息するものの中、いろんな中で、旅を続けた。

ずっと続けられはしないことは、分かっていた。それでも、走り続けた。

この両手をめいいっぱい広げて、この両足をめいいっぱい蹴り上げて、走って走って、いろんなもののそばを通り過ぎて、いろんなものの中をかけた。

そんななかで、不思議なものに出会った。

黒くてさらさらで、オレンジに近くて、そうじゃない、あたたかな、何か。

僕は消える寸前だったと思う。でも、はつきりと覚えている。

僕は、ありったけの力をこめてかけよった。

僕の手は、それに届いた。暖かい。

でも、当然、触れることなんかできなかった。そのまま僕は通り過ぎて、さらさらと流れる黒い何かを横目で捉えた。

僕が君にこがれたことは、きつと君は一生知らないのだろう。

僕が君にこがれたことは、知ることなど、ありえないのだろう。

それでも僕は、消えるわずかばかりの時間に、君に会えたことをよ

かつたと、君のそばで消え去ろう。
この意識はきつと消えて、永遠に失われるかもしれないとしても。

風と木と少女

木があつた。少女は、木が好きだつた。風も、大好きだつた。

少女は、木とも、風とも違つていたが、木とも、風とも似ていた。

やがて少女は木の体内に取り入れられて、ただ、傍観するだけのものから、一緒に育てあげるものへと変わった。

でも、少女はすぐに木の体内から出されてしまう。少女はずっと同じ場所にとどまる事ができなかったからだ。

それでも、木と、一緒にいた。木が好きだと思えたからだ。木のそばにいたいと願つた。

それは叶わないことだつた。願うたびに少女は苦しくなつた。雷鳴が轟いた。鈍色の雲が広がつた。

時には大粒の涙だつて流れた。

それでも、とどまり続けることはできなかった。そこへ少女は風と出会つた。

少女は、風に惹かれた。木と同じくらい惹かれた。儚いもの同士は、すぐに仲良くなつた。木をこれ以上困らせていけない、とそう思つた。

でも、すぐに風とずっと一緒にはいられないことを少女は、また知つた。

少女は留まることができないし、それは風も一緒だつたが、風はある日突然吹いてきて、どこかに消えてしまうことを知つていた。

長くは続かない、それでも少女はつかもうともがいた。

あたたかな日差しは、眺めていたらすぐに消えて、冷やかな夜が来る。

夜は、ひとりぼっちになつた少女を、照らしてくれた。ときには雲もかかり、涙も溢れた。少女は、自分が何かを傷つけるということを知つた。

少女は、ただ、漂つていた。そこへ、昼と夜ではない、別のものが

少女を迎えてくれた。

風と木だった。少女は、息が詰まった。うまく、均衡がとれなくてやがてゆっくりと、冷ややかな氷が落ちた。

木が嫌いそうな、冷たい、冷たい氷の結晶だった。風が嫌がりそう
な、重い、重い雲だった。

やがて少女はボロボロになった。鈍色の雲をまき、雷鳴を轟かせて、大粒の涙を流し、大好きな風も、木もなぎ倒し、こうなるであろう未来を回避する方法を探し続けていた。

でも、それでも、やめることなどできなかった。まだ小さめであるその火を消そうと今も少女はもがいている。次の嵐は、きつともつと大きい。

少女は、おおよその感情を理解していた。きっと、この火を消すこともできないことも知っていた。それでも、努力するしかなかった。少女のことを決められるのは、少女だけ。それでも、少女は願わずにはいらなかった。「誰か私に、新鮮な空気を」と。

クチバシ

触れる刹那、かすかに唇が震えて、音を聞き取ることが叶わなくてそのまま触れた、冷たい鉄

無音になったと思つたら、すぐに騒音。

肌はひりついて痛いくらいだ。

僕は探してた。チカチカ光る灯台みたいには探せなかったけど、風みたいに包んでいたかった。

押し殺してた、しょっぱい粒。わからないふりをして、やがて消えた。

たくさんの音が聞こえるね。

君はもうどこか遠く空の下にいるかい。

僕はここで揺れてるよ。

同じ空の下なのに、ずいぶんと遠いね。

熱で焦げる臭いと暑さ、痛くて、痛くて、悲鳴を上げる。

悲鳴をどんなにあげても、もっと大きな音にかき消されて、僕の悲

鳴はかき消される

僕らも生きている、だけど「生きるために仕方ないのだ」と言う。

僕らはただされるがままに、どんなに傷つけられても、そこでじっと耐えるしかないんだ。

君はそうじゃない、だから、だからどうか

そう願った。

幸せに、と。

また、きつと、いつか、どこかで会えるからと。

嘘の音は、きつと鉛のように鈍色で、冷たく、どんよりと重かっただろう。

その中のかすかな希望は、それでも、それでも叶えられるかもしれない

僕と君は、奇跡を信じる。

キセキなんかなくても構わない、ただ、無事で居てくれるなら僕は幸せだったから、君にも幸せでいてくれれば、それ以上のことはないんだよ。

僕は、ここで、新しいモノへと生まれ変わるね。

重い音と、軽やかな音、やがて僕は、世界をめぐるだろう。

そのとき、君にも会えたらいいと、思ってる。

仮面

僕は君のそばで誰よりも君と作り上げた喜びを感じたいと思った。

君が僕の一番見てほしいところを見ないことはわかっていた。

君が僕の一番評価してほしい部分を本気で評価しないこともわかっていた。

君の評価はいつでも甘かった。

僕は尻尾をふって、嬉しがっているふりをした。

足掻いても、無駄だとわかっていた。これが君なりの愛し方だから、悪気はまったくもないこともわかっていたし、君の決意はかたいから、説得でどうにかできるとも思っていなかった。

やりもしないで決め付けるな、ときつと誰かは怒るだろう。でも、僕にはわかりきっていたんだ。君のそばにいつづけたから。

君が見てくれないなら僕は姿形を変えようと、君の目にいつか留まる場所を探して定着した。

きつと君は気付かないことだろう。ここには、君が評価するものがたくさんありすぎるから。

それでも僕はこれにかけるしかなかった。

君に厳しい事を言われても良かった。

ただ、認めてほしい。

その一心で僕は、姿形を変えた。

甘くて優しいだけの餌なんていらない。僕を可愛がってくれる君は大好きだけど、僕が心の底から認めてほしい部分は、そこじゃないんだ。

僕は、二つの姿を持った。

一方では君に可愛がられる従順な姿で、一方では君の知らない厳しいマイペースな姿。それはまるで太陽と月のように、僕の中にはじめからどちらも息を殺していたようだった。

一気に空が夕闇にのまれて紫や赤になるように、また、一気に空気が水中で水面へ上がって弾けるように、僕とは違うまた別の僕の姿は驚くほどの変貌ぶりを見せた。

まだ僕は君には見つからない。

もうしばらくは見つかってはいけないし、僕は他人になりすます気でいる。

君と根本が似ている人になら見つかったけど、僕がきちんと僕のこ
とを見てもらいたいのはこの人じゃないんだ。

君なんだ。

だから僕は今日も仮面を使い分ける。

声

鳴いて、鳴いて、喜びの歌を。

鳴いて、鳴いて、美しい声で。

私は息を潜め狙う。美しい声とそのやわらかな肢体を。

ねえ、鳴いて。

もう一度、私にその声を聴かせておくれよ。

私を見つけた美しい声の持ち主は、飛び上がると、逃げるところか私を抱き締めた。

甘える気分じゃないと噛み付くと、寂しげな顔でそれは私と距離をおく。

ねえ、鳴いて、鳴いて。

美しいその声で。

手足を伸ばし、私に近寄ろうとするのなら、その体に痣ができるほど強く噛み付いてやろうか。

ただ鳴いてくれればいいんだ。

美しい声も、美しい体もいつの間にかどこかに置いてきてしまったこの私に、鳴いて声を聴かせておくれ。

その美しい肢体を奮わせながらさ。

悔しいなあ、悔しいなあ……。

視界が徐々に見えなくなつて、目から暖かな何かが落ちた。

人魚姫

冷たくも暖かい風を体いっぱい**に**浴びて、長くなった髪の毛をその風**に**そよがせた。

頬にあたった青い雫。

指ですくって舐めてみたら涙の味がした。

海は、海は泣いているの？

海は、海は鳴いているの？

柔らかくも灰色と青色とオレンジがまざった空は、柔らかな羽を作り上げていて、肩はねがその空にふわりと浮かん**で**いる。

マイメイド
人魚姫のように歌を歌いたい、歌を、歌を、私に。

声を、声を、私に。

けれど、この喉からは声などでない。

けれど、この体からは音などでない。

歌わせて、唄わせて。

この私に。

唄わせて、歌わせて。

この場所**で**。

空も飛べず、海も泳げず、大地を滑ることもかなわない。

声はかき消されて、波は弾かれて、空は切り裂かれて、また巡る。
また巡る。

巡っていく。

ねえ……またね。

瞳

柔らかな肢体、穏やかに目を細めたそれは、にこり、ともしなかった。

ただ、僕を見ただけだった。

やがてにこり、と微笑んで、やがてたくさん笑うようになって、やがて君の頬を何が撫でるのかまで知るようになった。

無垢な目、キラキラと輝く瞳、ああ。ああ、どうして。

君は嫌がるだろう、と僕は思っただけで複雑になった。

僕に君は神秘的すぎたのだ。そして僕は汚れていた。引き返すにはあまりにも遠い道程を共に歩んでしまった。

このままでいたいのに、このままではいられないと、崖が僕を追いかけてくる。

逃げ去ってしまったらどうだろう、君なら。

逃げ去ってしまったらどうだろう、君なら。

僕は、どうしたらいいんだろう。答えのわかりきった答えに身を投げた。

君を墜としてしまおうと、僕は身を乗り出し、一緒に引きずり込んでやろうと思った。

僕は君がもっと嫌がるものだと思っていた。

でも君は僕の胸に抱き抱えられたまま。

何の抵抗もなかった。

僕はほんの少しの絶望と、ほんの少しの嬉しさだけを抱え込んで、君と一つの騒音となって弾けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6892z/>

詩

2012年1月13日16時46分発行